

## 「戊辰戦争150年」に想う ～東北地方の「近代150年」

青森大学名誉教授 末永 洋一



10月23日は1868年の「明治」への改元から150年の節目に当たる。政府も「明治以降の歩みを次世代に遺すことは大変重要」だとして、今年に入ってから関連事業を行っているが、同日は憲政記念館で記念式典を挙行した。式典委員長でもある安倍首相は、明治維新を「今日の政治、経済、社会の土台が築かれた」と評価するとともに、急激な少子高齢化や激変する国際社会の中にある日本の現状を「国難」と位置づけ、「明治の人々に倣い、どんな困難にもひるむことなく未来を切り開いていく」と決意を表明した。そう言えば、「明治150年」を意識してか、NHK大河ドラマも「西郷どん」である。「維新3傑」とされる、西郷吉之助（隆盛）、大久保一蔵（利通）、桂小五郎（木戸孝允）が他の若い志士と共に苦闘の末に明治維新を成し遂げ、新しい日本のために懸命な努力を行っている。安倍首相の言葉はこうした史実を指していることは明らかであろう。

ところで、「明治150年」は、同時に「戊辰戦争150年」でもある。戊辰戦争とは、慶応4年／明治元年（戊辰の年）―明治2年、王政復古を経て明治政府を樹立した薩摩藩・長州藩・土佐藩らの中核とする新政府軍と、旧幕府勢力及び奥羽越列藩同盟が、鳥羽・伏見の戦いから会津戦争などを経て箱館戦争までを戦った内戦である。そして、この戊辰戦争において「敗者」となったのが東北地方であった。

「明治150年」は、封建制を打破し、困難に遭遇しつつ、跛行的な歩みの中で近代的国家体制・資本主義的社会を形成してきた時代だろう。しかし、視点を東北地方に置くならば、その歩みはさらに複雑で違ったものともなる。「敗者」であった東北地方は「白河北一山百文」と揶揄され、良質な木材を産出する森林は「一等官林」として抑えられ、国家主導の産業革命の結果として製造業は衰退し、鉱山開発も中央資本によるものだった。また、地主制の発展により農民の多くは零細な農地にしがみつくしか生活の糧はなかった。わが国が近代化の歩みを進める中で、その「萌芽」さえ刈り取られ、中央との格差が次第に拡大し、「大正2年大凶作」以降にあって、「辺境化」が固定されたと言える。こうした中では、人々の努力も水泡に帰すものが多く、原敬が「一山」と号し、新聞が「河北新報」と名乗ったのは反骨の現われではあるものの、しかし、戦前までは如何ともなし難かった。

戦後の民主主義体制の下では地方自治が重要な課題であり、その根幹は地方の自律・自立である。自らの英知と努力で経済産業の発展を追求し豊かな生活を実現していくことは一義的にはその地域の人々に課せられた課題となっている。我々、東北地方に居住する者には、「戊辰戦争150年」に思いを馳せながら、未来に向かって、地域の発展と暮らしの安定を図っていくことが求められていると言えよう。